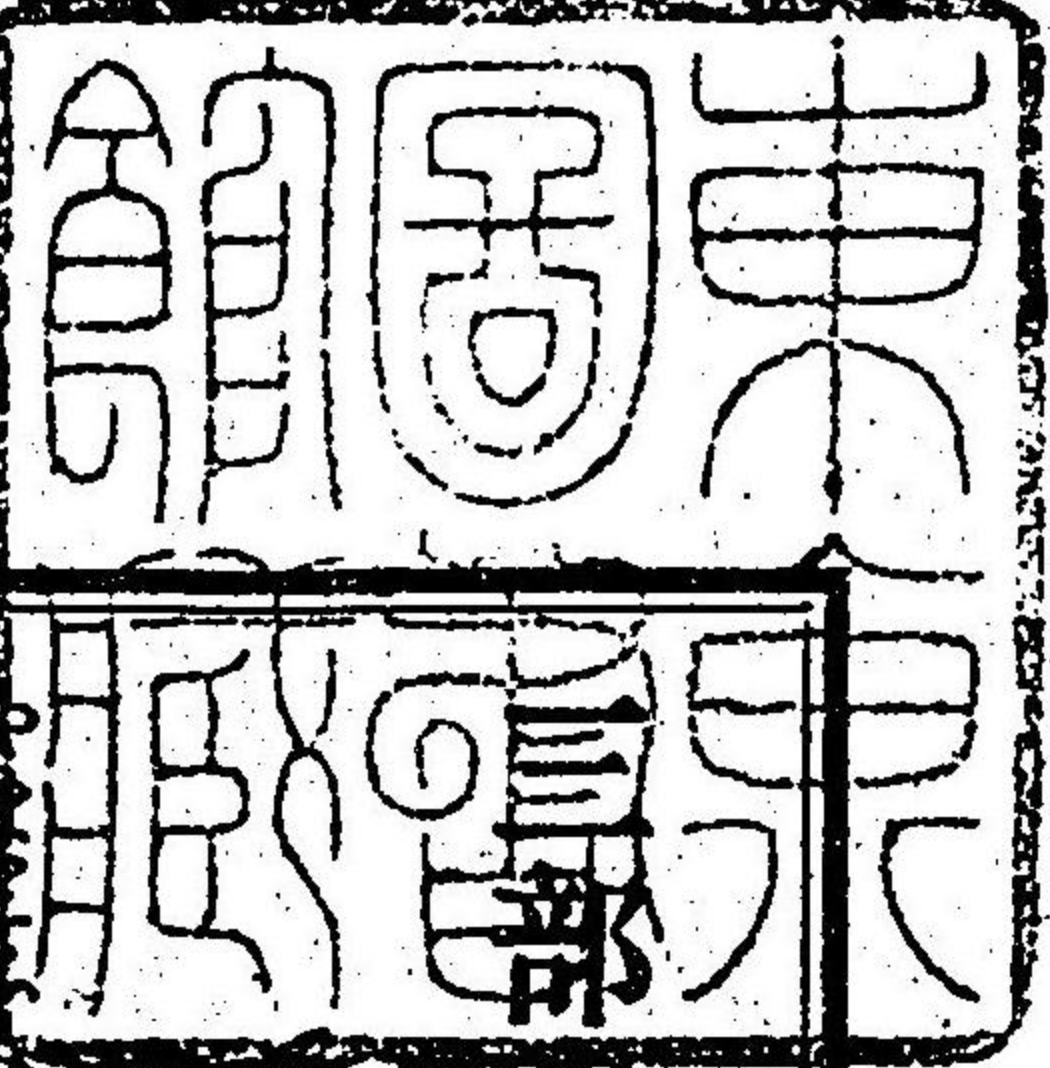


特56  
344

三部本紀

松岡調編輯

卷之四



本紀卷之四

事比羅宮主典兼權少教正松岡調謹校

日本紀

かみよのしものまき  
神代下

章孫天臨降

あまてらすねはみかみのみこと○まさはわかつかちはやびあめのねしほみみのみこと○たかみむすびのみことのみ  
天照大神之子 正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊娶高皇產靈尊  
むすめ○たかはちぢひめのみことにみあひまして○あまつひこはのにはぎのみこととらみたまふ○かれすめみ  
之女栲幡千千姬命 生天津彦彦火瓊瓊杵尊故皇祖

れやたかみむすびのみこと○こころにうつくしみてかたてひたしまつりたまひて○つひにすめみままつひこひこ  
高皇產靈尊 特鍾憐愛以崇養焉 遂欲立皇孫天津

はのにはぎのみことをたてて○あしはらのなかつくにのみまをなままくれもほしき○しかれともかのくにに○は  
彦彦火瓊瓊杵尊以為葦原中國之主 然彼地 多

たるなすかがやくかみ○さばへなすあしきかみさはにあり○またくささこころにこととひさやげり○かれたか  
有螢火光神蠅聲邪神 復有草木成能言語 故高

みむすびのみこと○やそよつのかみをめしつとへてとひたまはく○あれははらのなかつくにの○あしきかみ  
皇産靈尊召集八十萬神而問之 曰吾欲令撥平葦原中國

之邪鬼 當遣誰者宜也 惟爾諸神 勿隱

所知 僉曰 天穗日命是神之傑也 可不試歟

於是俯順衆言 卽遣天穗日命 平之

然此神 佞媚於大己貴神比及三年 尙不報聞 故

仍遣其子大背三熊大人亦名武三熊大人 此神亦還順其父

遂不報聞 故高皇産靈尊更會諸神

問當遣者 僉曰 天國玉命之子 天稚彦是壯士

也 宜試之 於是高皇産靈尊賜天稚彦 天鹿兒弓天

羽羽矢 以遣之此神亦不忠誠也來到其國 卽娶顯國王  
神之女子下照姬命 亦名高姬命 亦名稚國玉

命 因畱住之曰 吾亦欲馭葦原中國 遂不復

命 是時高皇産靈尊恠其久不來報 乃遣

無名雉 伺之 其雉飛降 止於天稚彦門前所植

湯津桂木之杪 時天探女見而謂天稚彦 曰奇鳥來居桂

杪 天稚彦 乃取高皇産靈尊所賜天鹿兒弓天羽羽矢

射雉斃之 其矢洞達雉胸而 至高皇産靈尊之座前也

時高皇産靈尊 見其矢曰 是矢則昔我賜天

此にたまひしやぞかし○このやにちまみれたるは○けだしくにつかみだたかひてしかるかもとのりたまひ○  
稚彦之矢也血染其矢 蓋與國神相戰而然歟 於

こにやをとらしてなげかへしたまひしかは○そのやれちくだりて○やがてあめわかひこがたかひなきかにあたり  
是取矢還投下之 其矢落下 則中天稚彦之胸上

○そのときあめわかひこがにひなへして○やすみふせるときなりけるに○やにわたりてたちごころにみまかり  
干時天稚彦新嘗 休臥之時也 中矢立死

○これよほどのいはゆるかへしやいひべし○ふことのもとなり○あめわかひこがめしたるひめのみこと○  
此世人所謂反矢可忌之縁也 天稚彦之妻下照姬命

なきかなしむこゑ○あめにきこえき○このときあまつくにたまのみこと○そのなくこゑをききて○かのあめわか  
哭泣悲哀聲達于天是時天國玉命 聞其哭聲則 知夫天

ひこがすでしにたることをしりて○すなはちはやちをやりて○かばねをわめにあげ○もやをつくりてあかりし  
稚彦已死 乃遣疾風 擧屍致天 造喪屋而殯之

○すなはちかはかりをささりもちとし○ささるははささもちとし○あるひはふかけをささりもちとし○かはか  
即以川鴈爲持頤頭者以鷺爲持帚者一云以鷄爲持頤者以

りをはさもちとす○すすめをつさめとし○そにをものまをとし○ささるをなさめとし○をひをゆふつくりとし○  
川鴈爲持帚者以雀爲春者以鷓鴣爲尸者以鷓鴣爲哭者以鷓鴣爲

からすをししひととし○すべてもろものとりをもてことよさして○やかやよなきかなしみうたひき○さきにわ  
造木綿者以鳥爲穴人者凡以衆鳥任事而八日八夜啼哭悲歌

めわかひこ○あしはらのなかつくにありしとき○あぢすきたかひこねのかみと○うるはしかりき○かれあぢす  
先是天稚彦在於葦原中國也與味耜高彥根神友善 故味耜  
きたかひこねのかみ○あめにのぼりてもとぶらひたまふとき○このかみのかはかたち○あめわかひこがいけり  
高彥根神 昇天弔喪時 此神容貌 正類天稚彦平  
しとき○さきにいとよくにたりき○かれあめわかひこがうからやからめこども○みなあがさみはしなすてましけ  
生之儀 故天稚彦親屬妻子 皆謂吾君猶在則

りごらひて○ころもにつかみかかりて○よろこひもしまほひもしき○ここにあぢすきたかひこねのかみ○さわ  
攀牽衣帶 且喜且慟 時味耜高彥根神 忿

りれもはてりていひけらく○ともがさはあひとふべきことわりぞとれもへこそ○けがらはしこをはばからずて○  
然作色曰 朋友之道理宜相弔故 不憚汚穢

はらばらにみづからとぶらひきつれ○なにしかあれをしにびとにはあやまてるをいひて○そのはかせるつるぎ  
遠自赴喪 何爲誤我於亡者則 拔其所帶劍

たははかり○またのなはかむとのつるぎをぬきて○もやをささりふせしわば○それすなはちちちてやまとなりき○  
大葉刈亦名神 戸劍以 斫仆喪屋 此即落而爲山

いまみぬのくにあむがはのほどりなるもやまそれなり○よのひとさきひとをしにびとにあやまつことをいひは  
今在美濃國藍見川之上喪山是也世人惡以生誤死

○これそのことのもとなり○このちたかみむすびのみこと○さらにもろものかみたちをつとへて○あしはらの  
此其縁也 是後高皇產靈尊 更會諸神 選當遣

なかつくにつかはすべきかみをえらびたまふに○みなまをさく○はさくねさくのかみのこと○いはつつのをい

命曰

磐裂根裂神之子磐筒男

於葦原中國者  
はつつのめのかみのうめることふつぬしのかみ○これえけむをさし○ここにありのいはやにすめるかみ○い

警筒女神所生之子經津主神是將佳也  
つのをばしりのかみのことみかはやびのかみ○みかはやびのかみのことみかはやびのかみ○みかはやびのかみのこと

稜威雄走神之子瓊速日神瓊速日神之子熯速日神熯速日神  
けみかつちのかみあり○このかみすすみでてまをさく○おにたたふつぬしのかみ○ひとりますらをにして○あれ

之子武甕槌神此神進曰  
豈唯經津主神獨爲丈夫而吾

非丈夫哉  
其辭氣慷慨 故卽配經津主神 令平

葦原中國  
於是二神 降到出雲國五十田狹之小汀則

拔十握劍 倒植於地 踞其鋒端而 問大己貴神

曰高皇產靈尊欲降皇孫 君臨此地故

先遣我二神 驅除平定 汝意何如 當須避不

いなやとどひたまふとき○ねはなむぢのかみこたへまをさく○あがこにひてのちかへりごとまをさむとまを

時 大己貴神對 曰當問我子然後將報

是時其子事代主神遊行 在出雲國三穗碕 以

釣魚爲樂 或曰 遊鳥爲樂 故以熊野諸手船亦名天鳩船

載使者稻背脛遺之而致高皇產靈尊勅 於事代主神

且問將報之辭時 事代主神 謂使者 曰今

天神有此借問之勅 我父宜當奉避 吾亦不可違因

於海中造八重蒼柴籬 踏船柁而避之 使者既還報命

故大己貴神則以其子之辭 白於二神

曰我怙之子既避去矣 故吾亦當避 如吾防禦者 國內諸

神 必當同禦 今我奉避 誰復敢有不順者

乃以平國 所杖廣矛 授二神 日吾以

此矛 卒有治功 天孫 若用此矛 治國

必當平安 今我將隱去百不足八十隈矣言訖即躬披瑞八

坂瓊而 長隱常世鄉矣 於是二神 誅諸不

順鬼神等 一云 二神 遂誅邪神及草木石類

皆已平了 其所不服者 唯星神 香 香背男耳 故加遣

倭文 神 建葉槌命 則服 故二神登天也

果以復命 于時高皇產靈尊以眞牀追衾 覆於

皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊 使降之 皇孫 乃離天

磐座 且排分天八重雲 稜威之道別道別而天降於日

向襲之高千穗峯矣既而皇孫遊行之狀 則自穗日二上天浮

橋 立於浮渚在平處而警穴空國自頓丘覓國行去到於

吾田長屋笠狹狹矣 其地有一人自號事勝國勝長狹命

皇孫 問曰有國耶以不 對曰此有國焉請任意遊之

故皇孫 就而畱住 時彼國有美人 名曰

鹿葦津姬命 亦名神 吾田津姬命 亦名 木華開耶姬命

皇孫 問此美人曰汝誰之女子耶 對曰妾是大山祇神

所生兒也 皇孫 因而幸之 卽一夜而有娠 皇孫

未之信曰 假雖復天孫之子何能一夜之間 令人

有娠乎汝所娠者必非我子歟 故鹿葦津姬命 忿恨

乃作無戶室 入居其内而誓之 曰妾所娠若非天

孫之胤 必當蕪滅 如實天孫之胤 火不能害

卽放火燒室 始起烟末生出之兒 號火闌

降命 次避熱而居生出之兒 號彥火火出見尊 次

出生之兒 號火明命 凡三子矣 久之

天津彥彥火瓊瓊杵尊崩 因葬筑紫日向可愛陵

こなりとこれへたまひき○すめみまのみこと○かくてめしたまひつれば○やがてひとよにしてはらみぬ○すめみ

まのみこと○うたがはしてのりたまはく○あまつかみのみことますとも○いかでよくひとよのはせに○はらまし

めむ○いししがはらめるは○かならずあがみこにあらじとのりたまひき○かれかわしつひめのみこと○うちみま

つりて○すなはちうちむろをつくり○そのうちにいりて○うけひまをしげらく○あがはらめるこもしあまつ

かみのみこにあらすは○かならずやけはるびなむ○もしまことにあまつかみのみこならば○ひもえそこなはじと

ことまをし○つぎにはとほりまをさけてますまになりいでませるみこと○ひこははでみのみことまをし○つ

ぎになりいでませるみこと○はわかりのみことまをす○すべてみはしらのみこまをし○ひさしくましまして○

あまつひこはのににぎのみことかむさしぬ○かれつくしのひむかのえのみこまをにまをまつりき○

一書曰 天照大神 勅天稚彦 曰豊葦原中國是

吾兒可主之地也 然慮有殘賊強暴横惡之神 故汝先

往平之 乃賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢遣之 天

稚彥受勅降 則娶國神女子 經八年無以

報命 故天照大神 乃召思兼神 問其不來之

狀 時思兼神思而告 曰宜且遣雉問之

於是從彼神謀 乃使雉往候之 其雉飛下

居于天稚彦門前湯津桂樹之杪而鳴曰 天稚彦何故

八年之間未有復命時 有國神 號天探女

そのまきしをみて○なきをあしきとてこのまのうへにをり○いころしたまひねといへば○あめわかひこ

見其雉 日鳴聲惡鳥在此樹上 可射殺之 天稚彦

すなはちわまつかみのたまひし○あまのかこゆみあまのまかこやをとりて○いころせば○そのまきしのむね

乃取天神所賜 天鹿兒弓天真鹿兒矢射之 其矢達雉胸

をとほりて○わまつかみのみもとにいたりき○あまつかみそのやをみそなはしてのりたまはく○こはまきに

遂 至天神所處 天神見其矢日 此昔我

あかあめわかひこにたまひしやぞかし○まきしかにしてまつらむとのりたまひて○やをとりしてこひたま

賜天稚彦之矢也 今何故來乃 取矢而呪之

はく○もしきたなきころもちていつるならば○あめわかひこかならずまじこらえなむ○もしまきしころ

日若以惡心射者則 天稚彦必當遭害 若以平心

もちていつるならば○かならずつみなけむとこひたまひて○なげかへしたまへば○やがてそのやれちく

射者則 必當無恙因 還投之 即其矢落下

だりて○あめわかひこがたかひなさにあたりて○たちをころにみまかりき○これよひとかへしやれそるべ

中于天稚彦之高胸而立死矣 此世人所謂返矢

しといふことのもとなり○ここにあめわかひこのめこども○あめよりくだりきて○ひつさをもちあめにのぼ

可畏之縁也 時天稚彦之妻子從天降來 將柩上去於天

りゆきて○もやをつくりてあがりしなきさ○これよりさあめわかひこ○あぢすきたかひこねのかみ○う

而作喪屋殯哭之 先是天稚彦 與味耜高彥根神友

るはしかりき○かれあぢすきたかひこねのかみ○あめにのぼりもをどふらひていたくみなさす○まきにこの

善 故味耜高彥根神 登天弔喪大臨焉 時此

かみのかほ○れのづからあめわかひこといよくにたりき○かれあめわかひこがめこども○みよこびて○

神形貌自與天稚彦恰然相似 故天稚彦妻子等見而喜之

あがきみはなほしなすてましけりといひて○ころもにつかみかかりて○れしをけあへざりき○このまあぢ

日吾君猶存則 攀持衣帶 不可排離 時味耜

すきたかひこねのかみ○いかりていひけらく○まがきのうせたれこそ○あはすなはちどふらひきつれ○な

高彥根神 忿日 朋友喪亡故 吾即來弔 如

にしかもあれをしにびににあやまつるといひて○すなはちどつかつるきをぬきて○もやをさりたましき○そ

何誤死人於我耶 乃拔十握劍 斫倒喪屋 其

のやれちてやまとなりき○これすなはちみぬのくにもやまなり○よひとしにびをのれにあやまつこと

屋墮而成山 此則美濃國喪山是也世人惡以死者誤己此

をいむこれそのことのもとなり○このまあぢすきたかひこねのかみ○よとほひいとうるはしくて○ふたを

其縁也 時味耜高彥根神 光儀華艷 映于

ふたたにのあひたにてりわたりき○かれあぢすきたかひこねのかみのいも○したてるひめのみこと○もろび

二丘二谷之間 故味耜高彥根神之妹下照姬命 欲令

とにをかたににかがやくかみは○これあぢすきたかひこねのかみぞとしらしめむとれもひて○うたひけら

衆人知映丘谷者是味耜高彥根神故 歌曰

○七



くあるははふもにつゝへるかみのうたひけらく○あめなるや○れとたなばたの○  
或曰 喪會者歌曰 阿妹奈屢夜乙登多奈婆多廼

うながせる○たまのみすまる○みすまるの○あなだまはや○み  
汚奈餓勢屢多磨廼彌素磨屢彌素磨屢廼阿奈陀磨波夜彌

たに○ふたわたらす○あぢすきたかひこねのかみぞや○またうた  
多爾輔拖和拖邏須阿泥素企多伽避願彌廼伽微贈也又歌

ひけらく○あまさかる○ひなつめの○いわたらすせ○いしかはか  
日 阿磨佐箇屢避奈菟謎廼以和多邏素西渡以嗣箇播箇

たぶち○かたぶちに○あみはりわたし○ゆるよしに○よしより  
拖輔智箇拖輔智爾阿彌播利和拖嗣妹盧豫嗣爾豫嗣豫利

これ○いしかはかたぶち○このふたうたは○いまひなふりといふ○かくてあまてらすたは  
據彌以嗣箇播箇拖輔智此二首歌辭今號夷曲既而天照大

みかみ○れもひかねのかみのいろも○よろづはたよあきつひめのみことを○まさかあかつかはやびあめ  
神 以思兼神妹 萬幡豊秋津姬命 配正哉吾勝勝速

のれしほみのみことにあはせてみめとしたまひて○あしはらのなかつくにはあまくだりまさしめたまひさ  
日天忍穗耳尊爲妃 令降之於葦原中國

○このときかちはやびあめのれしほみのみこと○あめのうきはしにたたして○はせりてのりたまはく○か  
是時勝速日天忍穗耳尊 立于天浮橋而 臨眺之日 彼

のくにはなはさやげり○いなかぶししこめさくにかもとのりたまひて○すなはちさらにかへりのばらして○  
地未平矣 不須也頗傾凶目之國歟 乃更還登

くだりたまはぬよしをつばらにまをしたまひさ○かれあまてらすたほみかみ○またたけみかつちのかみと○  
具陳不降之狀 故天照大神 復遣武甕槌神

ふつぬしのかみををつかはして○まづゆきてはらはしめたまふ○このときふたばしらのかみ○すつものくに  
經津主神 先行駈除 時二神 降到出

にくたりつきて○すなはちねはなむちのかみにとひけらく○いましこのくにをあまつかみにたてまつらむや  
雲國 便問大己貴神 日汝將此國奉天神耶以不

たてまつらむやとひたまへば○こたへまをしたまはく○あがことしろぬしのかみ○どりのあぶびして○  
對曰 吾兒事代主神射鳥遊遊

みつのちぎにあり○すまそれにとひてみこたへまをさむとまをして○すなはちつかひびとをつかはしてとひ  
在三津碕今當問以報之 乃遣使人訪焉

たまへば○こたへまをさく○あまつかみのこひたまふを○すかたてまつらむらむとまをしき○かれねはな  
對曰 天神所求 何不奉歟 故大己

むちのかみ○そのみこのことをもちて○ふたばしらのかみにみこたへまをしき○かれふたばしらのかみ○あ  
貴神以其子之辭 報乎二神 二神 乃

めにのぼりてかへりむとまをしつらく○あしはらのなかつくには○みなすでにことむけをへぬとまをしき○  
昇天復命而告之曰 葦原中國 皆已平竟

ここにあまてらすはみかみ○しからばあがみこそくだしまつりてむのりたまひき○ここにからはやびあ  
時天照大神 勅曰若然者方當降吾兒矣 時勝速日天

めのかしほみみのみことまをしたまはく○あれくだりなむとせしほはに○みこそすであれまし○みなをあま  
忍穗耳尊奏曰 吾且將降間 皇孫已生 號曰天

つひこはのににぎのみことまをす○このみこそかへてくだしてむとれもふとまをしたまひき○かれあ  
津彦彦火瓊瓊杵尊 欲以此皇孫代降 故天

まてらすはみかみ○すなはちあまつひこはのににぎのみこと○やさかにのまがたま○またやたか  
照大神 乃賜天津彦彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫

鏡天叢雲劔 三種寶物 又以中臣上祖 天兒屋

命 忌部上祖 天太玉命 猿女上祖 天鈿女命

鏡作上祖 石凝姥命 玉作上祖 玉屋命 凡五

部神 使配侍焉 因勅皇孫曰 豐葦

原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可主之地也 爾皇孫宜就

而治焉 行矣 實祚之隆 當與天壤無窮

矣 已而且降之間 先驅者還白 有

一神居天八達衢其鼻長七咫 背長七尺餘 且口明耀

眼如八咫鏡而超然似赤酸漿也 卽遣從神往問

之時 有八十萬神 皆不得目勝相問故特勅天

鈿女命曰 汝專是目勝於人者 宜往問之 天

鈿女命 乃露其胸乳 抑垂裳帶於臍下而笑嚙向立

是時衢神問 曰汝爲如此何故耶 天鈿女

命對曰 天照大神之子所幸道路 有如此居者誰

とひたまへば○ちまたなるかみこたへまをしけらく○あまてらすはみかみのみこ○いまくだりまじとさ  
耶敢問之衢神對曰 聞天照大神之子今當降行故

まづるゆゑに○ちかへまつらむとむらふぞ○あがなはさるたびこのたはかみなりとまをしき○ここにあり  
奉迎相待 吾名是猿田彦大神 時天鈿

のうすめのみこと○またとひけらく○ましあれにままたゆかむか○はたあれましにままたゆかむか  
女命 復問曰 汝將先我行乎 抑我將先汝行乎

ととへば○こたへまをしけらく○あれさまたちてみまはらはむとまをしき○あめのうすめのみこと○また  
對曰 吾先啓行 天鈿女命 復

とひけらく○ましはいづくにいたり○すめまのみことは○いづくにいたりまじとへば○こたへまを  
問曰 汝何處到耶 皇孫 何處到耶 對曰

さく○あまてらすはみかみのみこは○つくしのひむかのたかほのくじふるのたけにいたりますべし○あは  
天照大神之子則 當到筑紫日向高千穂穗觸峯 吾

いせのさながたいすすのかはかみにいたるべしとまをし○またあれをあらはせるかみはいましなり○かれい  
則應到伊勢狹長田五十鈴川上因曰發顯我者汝也 故汝

ましわれをれくりてよとまをししかば○あめのうすめのみこと○かへりまわでてかへりこまをしき○こ  
可以送我而致之 天鈿女命 還詣報狀 皇

にすめまのみこと○あめのうすめはなれ○あめのやへくもをれしわけて○すつのちむらひまてあま  
孫於是 脫離天磐座排分天八重雲 稜威道別道別而

くだりましき○まこととまのちぎりのごとく○すめまのみことは○すなはちつくしのひむかのたかほの  
天降也果如先期 皇孫 則到筑紫日向高千穂

くじふるのたけにいたりまし○そのさるたびこのかみは○いせのさながたいすすのかはかみにいたりき○すな  
穗觸峯 其猿田彦神則到伊勢狹長田五十鈴川上

はちあめのうすめのみこと○さるたびこのかみのこはしのまにまに○つひにさむらひれくりき○ここにすめ  
即天鈿女命 隨猿田彦神所乞 遂以侍送焉 時皇孫

みまのみこと○あめのうすめのみことにのりたまはく○ましあらはせるかみのなを○うちかばねとせよと  
勅天鈿女命曰 汝宜以所顯神名爲姓氏焉

のりたまひて○すなはちさるめのみこととまをたまひき○かれさるめのみらをとこもをみなも○みなさ  
因賜猿女君之號 故猿女君等男女 皆呼

るめのみことよみ○これそのことのもとなり○  
爲猿女君此其緣也

あるふみにいはく○あまつかみ○ふつぬしのかみ○たけみかつちのかみをつかはして○あしはらのなかつく  
一書曰 天神 遣經津主神武甕槌神 平定葦原中

にを○ことむけしめたまふとまに○ふたばしらのかみまをさく○あめにあしさかみあり○なをあまつみかば  
國時 二神曰 天有惡神 名曰天津

しとふ○またのなはあめのかがせを○まづこのかみをつみなひて○さてのちにくだりて○あしはらのな  
甕星亦名 天香香背男 請先誅此神 然後下 撥葦原中

つくにをはらひてむとまをしき○しかしか○かくてふたばしらのかみ○いつものいたさのをばまにくたりつ  
國 云云既而二神 降到出雲五十田狹

さて○ねはなむぢのかみにとひけらく○みましこのくにをあまつかみにたてまつらむやいなやとひたまへ  
小汀而問大己貴神曰汝將以此國奉天神耶以不

ば○こたへまをさく○うたがはしみましふたりは○このあがもとにさませるにはあらじ○かれえうなひま  
對曰 疑汝二神 非是吾處來者 故不須許

つらじとまをしたまひき○ここにふつぬしのかみ○たけみかつちのかみ○すなはちかへりのほりて○かへり  
也 於是經津主神武甕槌神則還昇 報告

ごまをしたまふとまに○たかみひすびのみこと○すなはちふたばしらのかみをかへしつかはして○ねはな  
時 高皇產靈尊乃還遣二神 勅大

ひぢのかみにのりたまはく○いまいましがまをすことをさくに○まことにそのいはれあり○かれさらになら  
己貴神曰 今者聞汝所言 深有其理 故更條條

をちにしてのりたまふ○そのいししがしらせるあらはにことは○すめみまのみことをほしらすべし○いましは  
而勅之 夫汝所治顯露事 宜是皇孫治之 汝則

かくりことをしらすべし○またいましがすむべきあめのひすのみやは○すまつくらせむ○そのみやつくりの  
可以治幽神事又汝應住天日隅宮者今當供造其造宮之制

りは○はしらはたかくふとく○すなはちひろくあつく○すなはちひろくなくはなはもてむすびて○ももやそむす  
者柱則高太 板則廣厚 卽以千尋榜繩結 爲百八

びとせむ○またみたまつくらせむ○またいましがうみにゆきかひあそはむをなへには○たかはしうきはし○  
十紉又將佃供田 又爲汝往來遊海之具 高橋浮橋

あまのとりふねもまたつくらせむ○またあめのやすのかはにも○うちはしをつくらせむ○またももやそぬひ  
天鳥船亦將供造 又造打橋於天安河 又供造百

のしらたてをそなへつくらせむ○またいましはまつりをつかさどらむかみは○あめのほひのみことなりと  
八十縫之白楯 又當主汝祭祀者 天穗日命是也

のりたまひき○ここにねはなむぢのかみこたへまをさく○あまつかみのみさとし○かくしもねもごろなり  
於是大己貴神報曰 天神勅教 慇懃如此

○いかでねはなむぢにしたらがはさらむ○あがしれるあらはにこは○すめみまのみことしらすべし○あはさ  
敢不從命乎 吾所治顯露事者天孫當治 吾將

かりてかくりごをしらむとまをして○すなはちふなごのかみを○ふたばしらのかみにすすめて○このかみあ  
退治幽神事 乃薦岐神 於二神 日是當

れにかはりてつかへまつるべし○あはこれよりさりまつらむとまをして○やがてみみづから○みづのやさか  
代我而奉從也 吾將自此避去 卽躬 披瑞八

にをさきて○ごこしへにかくりましき○かれふつぬしのかみ○たけみかつちのかみ○ふなごのかみをみちび  
坂瓊而長隱矣 故經津主神武甕槌神 以岐神爲鄉

さきて○めつつことむけて○したかはぬものあれば○すなはちさりはふり○まつろふものは○すなはち  
導 周流削平 有逆命者 卽加斬戮 歸順者 仍加

はめめくみたまひき○このときまつろへりしひとこのかみ○たはものぬしのかみ○またことしるぬしのかみ

褒美 是時歸順之首渠 大物主神 及事代主神  
○すなはちやとよろづのかみを○あめのたけちにつとへ○ひさむてあめにのぼりて○そのまつろひのまこと

乃合八十萬神 於天高市 帥以昇天 陳其誠款時  
をまをすとき○たかみひすびのみこと○たはものぬしのかみにのりたまはく○いましもしくにつかみ

高皇產靈尊勅大物主神曰 汝若以國神爲  
をめとせば○われなほいましうとふるころありとれもはむ○かれいまわがひすめはつひめのみことを○

妻 吾猶謂汝有疏心 故今以吾女三穗津姬命  
いましにわはせむめとせよ○やとよろづのかみをひさむて○とこしへにすめまのみことのみために○まも

配汝爲妻 宜領八十萬神 永爲皇孫 奉  
りまつれどのりたまひて○すなはちかへりくだらしめたまひき○かれたかみひすびのみことのみために○

護 乃使還降之 高皇產靈尊因勅曰  
われはあまつひもろぎを○あまついはさかにたてて○すめまのみことのみためにいはひまつりてむ

吾則起樹天津神籬於天津磐境當爲皇孫奉齋矣  
○いましあめのこやねのみこと○あめのふとたまのみことは○あまつひもろぎをもちて○あしはらのなかつ

汝天兒屋命 天太玉命 宜持天津神籬降於葦原  
くにくだりて○またすめまのみことのみために○いはひまつれどのりたまひて○すなはちふたばしらの

中國 亦爲皇孫 奉齋焉 乃使二神

かみを○あめのれしほみのみことにてへて○くだしたまひき○すなはちきのくにのいみべのどほつたや○

陪從天忍穗耳尊以降之 卽以紀國忌部遠祖

たれきはたひのかみを○かさねひとさだめ○ひこさしりのかみを○たてぬひとさだめ○あめのまひとのか

手置帆負神定爲作笠者彥狹知神 爲作盾者天目一箇神  
みを○かなたくみとさだめ○あめのひわしのかみを○ゆふはきとさだめ○くしあかるたまのかみを○たます

爲作金者 天日鷲神 爲作木綿者櫛明玉神 爲作  
りとさだめ○すなはちあめのふとたまのみことのみよわかたに○ふとたすきをとりかけて○みてしるとして○

玉者 乃使天太玉命以弱肩 被太手襪而 手代以  
このかみをまつらしむること○これよりはじまりき○このときいはひぬしのかみを○いはひのうしとまをし

祭此神 始起於此矣是時齋主神 號齋大人  
き○このかみいまあづまのくにのかどりのところによす○またあめのこやねのみことは○かひわぎのものを

此神今在乎東國楸取之地也且天兒屋命 主神事之  
つかさどるかみなり○かれふとまにのうらわさをもて○つかへまつらしめき○このときあまてらすはみか

宗源者也 故俾以太占之下事而奉仕焉是時天照大神  
み○みてにみかがみをもたして○あめのれしほみのみことによつてまつりて○ほぎたまひてのりたまはく

手持寶鏡 授天忍穗耳尊而 祝之曰  
○あがみこのみかがみをみまはひこと○あれをみるがごとくしたまふべし○ひとつみあらかひとつみゆか

吾兒視此寶鏡 當猶視吾 可與同床共殿以

為齋鏡

復勅天兒屋命天太玉命

にませて○いはひのかがみとしたりたまふべしとのりたまひき○またあめのかねのみこと○あめのみこと○たまたまのみこと○のりたまはく○やよしましふたばしらのかみも○ねやしみやぬちにさむらひて○よくみまもりせよ○

惟爾二神亦

同侍殿内

善為防護

またのりたまはく○わがあまのはらにさこしめすゆにはのほも○またわがみにさこしめさすべしとのりた

又勅曰 以吾天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒

まひて○すなはちたかみすびのみことのみむすめ○みなはよろづはたひめのみことを○あめのねしほみみの

則以高皇彥靈尊之女號萬幡姬命

配天忍穗耳

みことにあはせ○みめとしたまひてくだしまつりき○かれここにねほそらにましましてうみませるみことを

尊 為妃降之

故時居於虛天而生兒

○わまつひこはのににぎのみこととまをす○かれこのみことをみちちにかへてくだしまつらむとれほし

號天津彥彥火瓊瓊杵尊 因欲以此皇孫代親而降

き○かれあめのかねのみこと○あめのみこと○またもろのともものをかみたちと○ことこ

故以天兒屋命天太玉命

及諸部神等

悉皆

とにそへたまひ○またみそつものまで○もはらさきのことさづけたまひき○しかしてのちあめのねしほみ

相授 且服御之物一依前授

然後天忍穗耳尊

のみこと○あめにかへりたまひき○かれわまつひこはのににぎのみこと○ひむかのくじひのたからほの

復還於天

故天津彥彥火瓊瓊杵尊降到於日向穗

たけにあまくたりまして○そししのむなそひくにを○ひたをよりくにまきをほりて○うさじまりたひらにた

日高千穗峯而警穴胸副國

自頓丘竟國行去立於浮渚在

たして○すなはちくにぬしことかつくにかつながさのかみをめして○とひたまへば○こたへまをさく○こ

平地乃召國主事勝國勝長狹神而訪之

對曰 是

にくにあり○かまかくもみことまにまにまをすさき○すめみまのみこと○みあらかたててとをまりま

有國也取捨隨勅時

皇孫

因立宮殿是遊

しましき○このちすめみまのみこと○うみべたにいでまして○かほよさをとめをみそなはしてとひたまは

息焉後皇孫

遊幸海濱

見一美人問曰

く○しましはたがむすめととひたまへば○こたへまをさく○わはねはやまつみのかみのむすめ○なはかひ

汝是誰之女子耶

對曰

妾是大山祇神之子名神

あたかあしつひめのみこと○またのなはこのはなのさくやひめのみこととまをしき○すめみまのみこと○のり

吾田鹿葦津姬命亦名 木華開耶 姬命

皇孫曰

たまはく○あれしましをせむせむとれもふをいかにせましとのりたまへば○こたへまをさく○わがちちねは

吾欲以汝為妻如之何

對曰

妾父大

やまつみのかみあり○とひたまへまをし○かれましたわがねいはながひめのみこととまをすもありとまを

山祇神在 請以垂問 因白亦吾姉磐長姬命在

したまひき○すめみまのみこと○すなはちねはやまつみのかみにのりたまはく○あれしましがむすめをみて

皇孫

因謂大山祇神曰

吾見汝之女子

○めとせむとれもふとのりたまひき○ここにねはやまつみのかみ○すなはちふたりのむすめに○ももどりの  
欲以爲妻 於是大山祇神 乃使二女 持百机

つくろしものをもたせて○たてまつりけるとき○すめみまのみこと○あねをばみにくしとれもほしけれ  
飲食 奉進之時 皇孫 謂姉爲醜

ば○めさすてかへしたまひ○いろどはかはよかりしかば○めしてみとあははしつ○すなはちひとよにしては  
不御而罷 妹有國色 引而幸之 則一夜有身

らみぬ○かれはながひめのみこと○いたくはなてとこひけらく○もしわまつかみのみこと○あをしりぞけた  
故磐長姫命 大慙而詛曰 假使天孫 不斥妾而

まはすてめさましかば○あれまさむみこのみよのちながくまして○いはほのどくとこしへならましを○い  
御者 生兒永壽 有如磐石之常存 今

ますでにしかしたまはず○ただれどのみめしたまひつれば○そのあれまさむみこは○かならずこのはなのと  
既不然 唯弟獨見御故 其生兒 必如木華

とく○あまひにうつろひなむとこひたまひき○あるひはふ○いはながひめのみこと○はぢうらみてつば  
之移落 一云 磐長姫命 恥恨而唾

きなきてふひけらく○うつしきあをひとくは○このはなのにはかにうつろふとき○うたてたどろへなむと  
泣之曰 顯見蒼生者 當如木華之俄遷 轉衰去矣

ふひき○これよひのちみじかきことのもとなり○こののちかひわたかわしつひめのみこと○すめみま  
此世人短折之縁也 是後神吾田鹿葦津姫命見皇

のみことにみえまつりて○あはわまつかみのみことをはらめり○わたくしにうみまつるべきにあらすまをし  
孫 曰妾孕天孫之子 不可私以生也

たまへば○すめみまのみこと○のりたまはく○あまつかみのみこといふとも○いかにぞひとよにはらしめむ  
皇孫曰 雖復天神之子 如何一夜使人娠

○そはわがみにあらじかどのりたまへば○かむわたかわしつひめのみこと○いたくはぢうらみて○すなは  
乎抑非吾之兒歟 神吾田鹿葦津姫命甚以慙恨乃作

ぢうつひろをつくりてうけひまをしけらく○わがはらめるみこと○もしわだしかみのこならむには○かならず  
無戸室而誓曰 吾所娠 是若他神之子者 必不

さかからじ○これまことにあまつかみのみこのみこにまさは○かならずささくあれましなむとまをしたまひ  
幸矣 是實天孫之子者 必當全生

て○すなはちそのひろぬちにうりて○ひをつけてむろをやく○そのほのほのたちとむるとさ○まつあれませ  
則入其室中 以火焚室 其焰初起時 先生兒

るみこを○ほすせりのみこをまをす○つぎにひのさかりなるときあれませるみこを○はわかりのみこと  
號火酸芹命 次火盛時生兒 號火明命

まをす○つぎにほのほしめるときあれませるみこを○ひこほはでみのみことまをす○またほをりのみこと  
次焰衰時生兒 號彥彥火火出見尊亦號火折

とまをす○  
尊

あるふみにいはく○はじめのはわかるるときに○あれませるみこはわがりのみこと○つきにはのほすすむと  
一書曰 初火燄明時 生兒火明命 次火炎盛時

生兒火進命 亦曰 火酸 芹命 次避火炎時 生

兒火折彦火火出見尊 凡此三子 火不能害 及母亦

無所少損 時以竹刀 截其兒臍 其所棄

竹刀 終成竹林 故號彼地曰竹屋于時神吾田鹿葦津

姫命以下定田號狹名田以其田稻釀天甜酒嘗之 又

用淳浪田稻爲飯嘗之

一書曰 高皇產靈尊 以眞床覆衾 裏天津彦國光彦彦

火瓊瓊杵尊 則引開天磐戶 排分天八重雲以

奉降之 于時大伴連遠祖 天忍日命帥來目部

遠祖天穗津大來目命 背負天磐靱 臂著稜威高

鞞 手捉天櫛弓天羽羽矢副持八目鳴鏑 又帶頭槌劔

而立天孫之前 遊行降來 天孫 到於日向襲

高千穗穗日二上峯天浮橋而 立於浮渚在平地磐穴

空國 自頓丘覓國行去到於吾田長屋笠狹碕時 彼處有

一神名曰事勝國勝長狹神亦名鹽土老翁 故問其神曰有

國耶 對曰有也 因隨勅奉矣 故天

孫 留住彼處 其事勝國勝長狹神者是伊奘諾尊之子



なり○也

あるふみにいはく○あまつかみのみこ○ねはやまつみのかみのむすめ○とよわたかあしつひめのみこをゆ  
一書曰 天孫 幸大山祇神之女子豊吾田鹿津姫命

しつれば○ひとよにはらみて○つひによばしらのみこをうみたまひき○かれとよわたかあしつひめのみこ  
則 一夜有身 遂生四子 故豊吾田鹿津姫命

○みこをいだきてまわきてまをさく○あまつかみのみこ○いかでわたくしにひたしまつるべき○かれこのさ  
抱子而來進曰 天神之子 寧可以私養乎 故告狀

まをまをすまをしたまひき○このときあまつかみのみこ○そのみこたちをみそなはして○あざわらひての  
知聞 是時天孫 見其子等 嘲之曰

りたまはく○あなにやしわがみこは○さきよくうみませるかもとのりたまひき○かれとよわたかあしつ  
妍哉吾子者 聞喜而生歟 故豊吾田鹿

ひめのみこ○すなはちうれたみて○なぞあれをあざけりたまふとまをせば○あまつかみのみこのりたまは  
葦津姫命乃愠 曰何爲嘲妾乎 天孫曰

く○わがころにうたがはしくれもふがゆゑにあざけるになも○いかにとなればあまつかみのみこといふ  
吾心疑之矣故嘲之 何則雖復天神之子

も○わによくひとよのはとにはらましめむやも○まこととはわがみこにあらじとのりたまひき○こをもてとよ  
豈能一夜之間使人有身哉固非我子矣 是以豊吾

なり○也

わたかあしつひめのみこ○ますますうらみて○うつむろをつくりて○みこをいだきて○そのうちにいりま  
田鹿葦津姫命益恨 作無戸室 抱子 入居其内

して○うけひけらく○わがうめるもしあまつかみのみこにまさすは○かならずやけうせなむ○もしあまつ  
誓曰 妾所生若非天神之胤者 必亡 是若天

かみのみこにまさば○そこなはるることなからましとらうけひて○すなはちひをつけてむろをやさき○そのひ  
神之胤者 無所害 則放火焚室 其火

のはじめてあかるるときに○ふみたけびていでませるみこ○みづからみなりのりたまはく○わはこれあまつかみ  
初明時 躡誥出兒 自言 吾是天神之

のみこ○なははわかりのみこ○わがみちらはいづこにますぞとのりたまひき○つぎにひのすすむとよに○  
子 名火明命 吾父何處坐耶 次火盛時

ふみたけびていでませるみこも○みなりのりたまはく○わはこれあまつかみのみこ○なははすすみのみこ○  
躡誥出兒亦 言 吾是天神之子名火進命

わがみちちまたみわにはいづこにますぞとのりたまひき○つぎにはのほしめるときに○ふみたけびていでま  
吾父及兄何處在耶 次火炎衰時 躡誥出兒亦

せるみこも○みなりのりたまはく○わはこれあまつかみのみこ○なははどりのみこ○わがみちちまたみわに  
言 吾是天神之子 名火折命 吾父及兄等

たちは○いづこにますぞとのりたまひき○つぎにはとほりさくるときに○ふみたけびていでませるみこも○  
何處在耶 次避火熱時 躡誥出兒亦

みなりのたまはく○わはこれわまつかみのみこ○なはひこははでみのみこ○わがみちちまたみわにたちは  
言 吾是天神之子 名彦火火出見尊吾父及兄等

○いづこにますぞのりたまひき○さてのちみははとよたかあしつひめのみこ○はたぐひのなかよりい  
何處在耶 然後母豐吾田鹿葦津姬命自火燼中出

でまゐきて○ことあげしてまをさく○わがうめりしみこまたわがみも○ひのわざはひにわへをも○いささか  
來就而稱曰 妾所生兒及妾身 自當火難 無所

そこなはるることなし○わまつかみのみこ○いかにみそなはしつやまをましたまへは○こたへたまはく○わ  
少損 天孫 豈見之乎 對曰 我

れもよりわがみこなることをしれりしかせ○ただひとよにしてはらめれば○うたがふひとあらむことを  
知本是吾兒 但一夜而有身 慮有疑者

もひて○もろびとに○みなこれわがみこなることをしらしめ○またわまつかみの○ひとよにえはらましむる  
欲使衆人皆知是吾兒 并示天神能令一夜有娠

ことをしめし○またいましはくしひなるみいつあること○みこたちもひとにすぐれたるいさほひあることを  
亦欲明汝有靈異之威 子等復有超倫之氣故

あかさむとれもふがゆゑに○ささのわざけりことはいひけるなりとこたへたまひき○  
有前日之嘲辭也

あるふみにいはく○あめのねしほねのみこ○たかみむすびのみこ○のみにみこ○ひのとはたひめのみこ  
一書曰 天忍穗根尊 娶高皇產靈尊之女子栲幡千千姬

どのみこ○よろづはたひめのみこ○またいはく○たかみむすびのみこ○のみにみこ○ひのとはたひめのみこ  
命之兒萬幡姬命 亦云 高皇產靈尊之兒火戸幡姬命之

のみこ○ちぢひめのみこ○にみわひまして○みこあめのほわかりのみこ○をうまたまひ○つきにあまつひこ  
兒 千千姬命而 生兒天火明命 次生天津

ねひこはのににぎのみこ○をうまたまふ○そのあめのほわかりのみこ○のみにみこ○あめのかぐやまのみこ○  
彦根彦火瓊瓊杵尊 其天火明命兒 天香山命

これをはりのひらじらかとほつたやなり○すめみまひこはのににぎのみこ○を○あしはらのなかつくにに  
是尾張連等遠祖也 及至奉降皇孫彦火瓊瓊杵尊於葦原

だしまつらむとするときに○たかみむすびのみこ○やよろづのかみたちへのりたまはく○あしはらのな  
中國也 高皇產靈尊 勅八十萬神曰 葦原中

かつくには○いはねこたちくさのかさはも○よくこととひ○よるははべのもころにたごなひ○ひるはさへ  
國 磐根木株草葉 猶能言語夜者若燦火而喧響之書

なしわさわがるのりたまひき○しかしかここにたかみむすびのみこ○のりたまはく○さきにわめわかひこと  
者如五月蠅而沸騰之云云時高皇產靈尊勅曰昔遣天稚彦

○あしはらのなかつくににつかはししを○いさまにひさしくまわさるゆゑは○けたしくにつかみにいひかふ  
於葦原中國 至今所以久不來者蓋是國神有強禦

ものありてかどのりたまひて○すなはちななさをさしをつかはして○うかがはしむるに○このをさじくだり  
之者 乃遣無名雄雉 往候之 此雄雉降

きて○わはよまゆふをみて○すなはちとせまりてかへらざりき○これよにはゆるさきしのひたづかひのこ  
來因見粟田豆田則留而不返 此世所謂雉頓使之縁也

そのもぎなり○かれまたななきめさじとつかはすに○このめさじくたりきて○あめわかひこにいらえ○その  
故復遣無名雌雉 此雌雉下來爲天稚彦所射中

やにあたりてかへりごとまをしき○しかしか○このときたかみむすびのみこと○すなはちまごこれふよすま  
其矢而上報之 云云是時高皇産靈尊 乃用真床覆衾

をもちて○すめみまあまつひこねひこほのににぎのみことをつみまつりて○あめのやへくもをれしわけて  
裏皇孫天津彦根彦火瓊瓊杵尊而 排披天八雲以

○くだしまつりたまひき○かれこのかみをたたへて○あめにぎしくにぎしひこほのににぎのみことをまを  
奉降之 故稱此神 曰天饒石國饒石彦火瓊瓊杵

す○そのくだりまししところは○ひひかのそのたかちほのそほりのやまのみねといふ○しかしか○いでまし  
尊其降到處 呼曰日向襲高千穗添山峯矣云云 及其

て○わたのかささのみささにいりたりますとき○つひにながやのたかしまにのぼり○すなはちそのところをめ  
遊行到於吾田笠狭碕 遂登長屋竹島 乃巡覽其地

ぐりみたまへば○そこにかみあり○なをこどかつくにかつながさのかみといふ○わまつかみのみこと○すなは  
彼處有一神名曰事勝國勝長狹神皇孫 因問

ちこれたかくにぞとひたまへば○こたへまをさく○こはながががすめるくになり○しかれをもいまあまつ  
曰此誰國歟 對曰 是長狹所住之國也然今乃奉

上天孫矣

皇孫

又問曰

其於秀起浪穗

へに○やひろをのをたてて○ただまもゆらにはたれるをよめは○たがむすめぞとひたまへば○こたへまを  
之上起八尋殿而手玉玲瓏織紐之少女者是誰之女子耶答

さく○ねはやまつみのかみのむすめたち○あねをいはながひめのみこととまをし○ねをよあつひめの  
曰大山祇神之女子等大號磐長姫命 小號豊吾田津

みこと○またのなはこのはなのさくやひめのみこととまをすまをしき○しかしか○すめみまのみこと○す  
姫命亦名木華開耶姫命 云云 皇孫 因

なはちとよあつひめのみことをめししかば○ひとよにしてはらみぬ○すめみまのみことうたがひたまふ○  
幸豊吾田津姫命則 一夜而有身 皇孫疑之

しかしか○つひにはすせりのみことをうたまひ○つぎにはほりのみこと○またのみなはひこほはでみのみ  
云云遂生火酢芹命 次生火折尊 亦名彦火火出見

こととらみたまひき○みははのうけひごと○すでにしるかりければ○はじめてまことにすめみまのみことの  
尊 母誓 已驗 方知實是皇孫之胤

みこにますことをしりたまひき○しかるにとよあつひめのみこと○すめみまのみことをうらみまつりて○  
然豊吾田津姫命 恨皇孫

わひごともしたまはざりしかば○すめみまのみことうれひまして○すなはちみうたよみしたまはく○ねさ  
不與共言 皇孫憂之 乃歌曰 憶企

つもは○へにはよれども○さねども○わたはぬかもよ○はま  
都茂幡陸爾播譽辰耐母佐禰耐據茂阿黨播怒介茂譽播磨  
つちせりよ○  
都智耐理譽

あるふみにいはく○たかみむすびのみことのみひすめ○あめのよろづたくはたちはたひめのみこと○あるひ  
一書曰 高皇產靈尊之女 天萬栲幡千幡姫命 一云

はいふ○たかみむすびのみことのみこよろづはたひめのみことのみこ○たまよりひめのみこと○このかみわ  
高皇產靈尊之兒 萬幡姫命之兒 玉依姫命 此神爲

めのたしはねのみことのみめとなりたまひて○みこあめのさほはれさせのみこととらみたまひき○あるひは  
天忍骨尊妃 生兒天杵火火置瀬尊 一云

いふ○かちはやびあめのたはみみのみこと○このかみにぐつひめのみことにみわひまして○みこはのにぎ  
勝速日天大耳尊 此神娶丹鳥姫命 生兒火瓊

のみこととらみたまひき○あるひはいふ○かみむすびのみことのみひすめ○たくはたちはたひめのみこ  
瓊杵尊 一云 神皇產靈尊之女 栲幡千幡姫命

と○みこはのにぎのみこととらみたまひき○あるひはいふ○あめのさせのみこと○わたつひめのみことに  
生兒火瓊瓊杵尊 一云 天杵瀬尊 娶吾田津姫

みわひまして○みこはあかりのみこととらみたまひき○つきにはよりのみこと○つきにひこははでみのみこ  
命 生兒火明命 次火夜織命 次彦火火出見

尊  
○

あるふみにいはく○まさかあかつかはやびあめのたしはみみのみこと○たかみむすびのみことのみひすめ  
一書曰 正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊娶高皇產靈尊之女

○あめのよろづたくはたちはたひめのみことをみめとしたまひて○うましめたまへるみことを○あまてるくに  
天萬栲幡千幡姫命爲妃而 生兒 號天照

てるひこはあかりのみことをまます○こはをはりのむらじらがとほつたやなり○つきにあめにぎしくににぎ  
國照彥火明命 是尾張連等遠祖也 次天饒石國饒

しあまつひこはのにぎのみこと○このかみねはやまつみのかみのひすめ○このはなのさくやびめのみ  
石天津彦彦火瓊瓊杵尊此神娶大山祇神之女木華開耶姬

ことをみめとしたまひて○うましめたまへるみことを○あまてりのみことを○つきにひこははでみのみ  
命爲妃而 生兒 號火酢芹命 次彦火火出見

尊  
○

いるせはせりのみことは○れのづからうまし○いろとひこははでみのみことは○れのづからやままし  
兄火闌降命 自有海幸 弟彦火火出見尊自有山幸

○ははじめいろせいろせ○あひかたらひて○ころみにをかへてむとのりたまひて○つひにかへたまへるに○  
始兄弟 相謂 日試欲易幸 遂相易之

各不得其利 兄悔之 乃還弟弓箭而 乞已鈎

弟時既失兄鈎 無由訪覓 故別作

新鈎與兄 兄不肯受而責其故鈎 弟患之

卽以其橫刀 鍛作新鈎 盛一箕而與之 兄忿

日非我故鈎 雖多不取 益復急責之 故彥火火出

見尊憂苦甚深行吟海畔時 逢鹽土老翁老翁問曰

何故若此愁乎 對以事之本末 老翁曰勿復

憂苦 吾當爲汝計之 乃作無目籠 內

彥火火出見尊於籠中 沈之于海 卽自然有可怜小汀 於

是棄籠遊行 忽至海童神之宮 其宮也雉堞整頓

臺宇玲瓏 門前有一井井上有湯津桂

樹 枝葉扶疏時彥火火出見尊就其樹下 徙倚彷徨良久

有一美人排闥而 手以玉梳來 當汲水 因

擧目視之驚而還入 白其父母 曰有一希客 在門

前樹下 海童神 先隱窺視之 言是天孫也

於是鋪設八重席薦以延內之坐定因問其來意時

彥火火出見尊對以情之委曲 海童神 乃集

大小之魚 遍問之僉曰不識 唯赤女此有口疾而不

りてまるこそ○かれしひてめして○そのくちをさぐりしかば○はたしてうせにしはりをえき○ひははでみのみ  
來 因固召之 探其口者 果得失鈎也 彦火火出

こと○すなはちわたつみのかみのひすめ○とよたまひめのみことにみわひましき○かれわたつみやにとどまりす  
見尊因娶海童神女 豐玉姬命 仍留住海宮

みたまふこと○すでにみとせをへたり○かしてはたぬしきところなれども○なほくにしぬびたまふみころまし  
己經三年 彼處雖復安樂 猶有憶鄉之情故

しかば○よりよりいたくなげさしたまひき○とよたまひめのみことをさかして○そのちちにまをしたまはく○  
時太息 豐玉姬命聞之 謂其父曰

あまつかみのみこ○うちふれてしばしばなげさしたまふは○けだしみにをしぬばしてうれひますならむとまを  
天孫 悽然數歎 蓋懷土之憂乎

したまへば○わたつみのかみ○すなはちひははでみのみことをひさまつりて○おもふるにまをしたまはく○あ  
海童神 乃延彦火火出見尊 從容語曰 天

まつかみのみこ○もしくににかへらむとれもはさば○われれくりまつりてむとまをして○すなはちえたるつりば  
孫 若欲還鄉者 吾當奉送 便授所得鈎

りをたてまつりき○かててをしへまをさく○このつりばりを○みましきことのみいふせにわたへたまはむとまに  
因誨曰 以此鈎 與汝兄時則

は○ひそかにまぢちどのりたまひて○のちにわたへたまへとまをし○またしほみつたまとしほひるたまをたて  
陰呼曰貧鈎 然後與之 復授潮滿瓊潮潤瓊而

まつりて○をしへまをさく○しほみつたまをひたしたまはば○しほたちまちにみちなむ○これをもちてみましき  
誨曰 漬潮滿瓊則 潮忽滿 以此沒溺汝

ことのみいふせをればらせたまへば○もしみいふせくいてのみまをさむには○またしほひるたまをひたしたまは  
兄 若兄悔而祈者 還漬潮潤瓊則

ば○しほれのづからひなむ○これをもちてすくひたまへ○かくせめなやましたまはば○みましきことのみいふ  
潮自涸 以此救之 如此逼惱則 汝兄

せ○れのづからしたかひなむとをしへまをしき○かへりまをさむとさになりて○とよたまひめのみこと○ひ  
自伏 及將歸去 豐玉姬命 謂

こははでみのみことにまをしたまはく○われすではらりり○みこらみなむことのみさしからねば○われかなら  
彦火火出見尊曰 妾已娠矣 當産不久 妾必以

すなみかせはやからむひに○うみへたにまむでむ○あがためにうみやをつくりてまらたまへとまをしたまひき○  
風濤急峻之日出到海濱 爲我作産室相待矣

ひこははでみのみこと○みやにかへりまして○もはらわたつみのかみのをしへまつりしまにまにしたまふとまに  
彦火火出見尊已還宮 一遵海童神之教時

○いふせはすせりのみこと○すでにたしなめらえて○すなはちまつりひまをさく○いまよりゆくさき○われみま  
兄火闌降命 既被因厄 乃自伏罪曰 從今以後 吾將

しみことのをさをさびととなりなむ○いかでいのちいけたまへとまをしたまへば○ここにそののみまをせるまに  
爲汝俳優之民 請施息活 於是隨其所乞

まに〇つひにゆるしたまひき〇このはすせりのみこととは〇わたのきみをばしのきみらがどほつれやなり〇のちに  
遂救之 是火闌降命即吾田君小橋君等之本祖也後

とよたまびめのみこと〇まことささのちきりのごとく〇そのいろとたまよりびめのみことをわて〇ただになみか  
豊玉姫命 果如前期 將其女弟玉依姫命 直冒風

せをしぬきて〇うみべたにまわきまして〇みこうまむとするとまをしけらく〇わがみこうまつらむとま〇  
波 來到海邊 逮臨産時請曰 妾産時

なみたまひそまをししを〇ひこははでみのみこと〇なはえしぬびあへずて〇ひそかにいでましてうかがひたま  
幸勿以看之 彦火火出見尊猶不能忍 竊往覘之

へば〇とよたまびめのみこと〇みこうまますまかりにたつになりてもこよひき〇しかしてひこははでみのみこ  
豊玉姫命 方産化爲龍逶迤 而知彦火火出見

どのかさまたまひしことをしらしめて〇いたくはぢてまをしけらく〇みましみこどもしあれにはぢみせたまはさ  
尊竊覘 甚慙曰 汝如有不辱我則

らましかば〇うみがちくぬがぢかよはして〇ながくへだてざらましとれもひしを〇いまかくはぢみせたまひつれ  
使海陸相通 永無隔絶 今既辱之

ば〇いかでかもうるはしみつかへまつらむとまをして〇やがてかやもてみことをつみまつりて〇うみべたにすて  
將何以結親昵之情乎 乃以草裹兒 棄之海邊

れきて〇うみつちをぢてただにさりましき〇かれみこのみなを〇ひこなきさたけうかやふまあへずのみことと  
閉海途而徑去矣 故以名兒 曰彦波瀲武鸕草葺不合

まをす〇このちひましくましまして〇ひこははでみのみことかむあがりましまして〇かれひむかのたかやのや  
尊 後久之 彦火火出見尊崩 因葬日向高屋

まへのみまはにかくしまつりて〇  
山上陵

あるふみにいはく〇いろせはすせりのみことは〇よくうみさちをえたまひ〇いろとひこははでみのみことは  
一書曰 兄火酢芹命 能得海幸 弟彦火火出見尊

〇よくやまさちをえたまひき〇ここにいろせいろと〇かたみにそのさちをかへてむとれもほしき〇かれいろ  
能得山幸 時兄弟 欲互易其幸 故兄

せいろとのさちゆみをもち〇やまにいりてけだものをかるに〇つひにけだものからとだもみす〇いろとは  
持弟幸弓 入山獵獸 終不見獸乾迹 弟持

いろせのさちばりをもたして〇うみにいでてうをつらすに〇さらにえたまはず〇つひにそのはりをさへに  
兄幸鈎 入海釣魚 殊無所獲遂失其鈎

らしなひたまひき〇このときいろせいろとのゆみやをかへして〇れのがはりをはたりき〇いろとられひま  
是時兄還弟弓矢而 責已鈎 弟患之

して〇すなはちみはかせるたちをもちて〇にひばりをつくりひとみにもりて〇いろせにあたへたまへども〇  
乃以所帶橫刀 作新鈎盛一箕 與兄

いろせうけすて〇なはあがさちばりをえむといひき〇ここにひこははでみのみこと〇もどめむすべをしりた  
兄不受 曰猶欲得吾幸鈎 於是彦火火出見尊不知所求

まはすして○たたられひさまよひましき○すなはちうみべたにいであして○ただすみなげきたまふとさにて○  
但レ有レ憂レ吟 乃レ行レ海邊 彷徨レ嗟レ嘆レ時

たさなひどりたちまちにいであして○みづからしほつちのをぢどなのりて○すなはちとひけらく○さみはたれ  
有一レ長老忽然而至レ自稱鹽土老翁 乃レ問曰 君是誰

どなにゆゑにここにうれひますとひまをせば○ひこはほでみのみこと○そのさまをつばらにのりたまへば  
者何故患於此處乎 彦火火出見尊具言其事

○をぢすなはちふくろのなかなるくろさくしをとりて○つちにかけしかば○いほつたかむらとなりき○かれ  
老翁即取囊中玄櫛 投地則 化成五百箇竹林

そのたけをとりて○ねほまわらこをつくり○ひこはほでみのみことをこのなかにいれまつりて○うちみしづ  
因取其竹作大目鹿籠 内彦火火出見尊於籠中 投之于

ゆまつりき○あるひはいふ○まなしかたまをうきさとし○ほそなはをもちて○ひこはほでみのみことをゆひ  
海 一云 以無目堅間為浮木以細繩擊著彦火火出見

つけて○しづまつりき○ここにわたのそこねのつからうましをばまあり○すなはちばまのまにまにいで  
尊而沈之 于時海底自有可怜小汀 乃尋汀而進

ませば○たちまちわたつみとよたまひこのみことのみやにいたりたまひき○そのみやは○かきかなをいとい  
忽到海神豊玉彦命之宮 其宮也城闕崇華

かめし○たか登のうてないとうるはしくして○かな登のまにむありて○むのかたはらにかつらのさあり○す  
樓臺壯麗 門外有井 井傍有桂樹 乃

なはちこのもよによりて○ややしまたらたまへれば○よになさかほよさをとめ○まかたらあまたかきつら  
就樹下 立之良久 有一美人容貌絶世侍者群從

ねて○うちよりいであして○たまもひもちてみづくまむとして○ひこはほでみのみことをあふきまつりて○  
自内而出 將以玉壺汲水 仰見彦火火出見尊

すなはちたれつろさかへりて○そのちちがみにまをしたらまはく○かな登のまへのむのかたへのこのもよにて○た  
便以驚還而 白其父神曰 門前井邊樹下 有

ふとさまらびとませり○かほかたたらだびとにあらす○もしめめよりくだれば○あめのけあるべく○つち  
一貴客 骨法非常 若從天降者 當有天垢 從

よりきたれば○つちのけあるべきを○まことをまくはし○そちつひこといふかみにやあらむとまをしたらま  
地來者 當有地垢 實是妙美虚空彦者歟

ひき○あるひはいふ○よたまびめのみことのみかたち○たまもひをもちてみづをくむに○つひにえみたす  
一云 豊玉姬命之侍者 以玉瓶汲水 終不能滿

○ふしてゐのなかをみれば○ひこのゑめるかほさかさまにうつれり○これによりてあふきみれば○うるはし  
俯視井中則 倒映人笑顏 因以仰觀 有一

さかみまして○かつらのさによりたり○かれかへりりてそのさみにまをしき○ここによたまびこのみ  
麗神 倚於桂樹 故還入白其王 於是豊玉彦命

こゝ○ひをくかはして○ひまをく○まらびとたれども○なにゆゑにここにいでませるとまをせば○ひ  
遣人問曰 客是誰者 何以至此 彦



こはほでみのみことこたへたまはく○あはあまつかみのみひこなりとのりたまひて○すなはちつひにいさま  
乃遂言來意

火火出見尊對曰 吾是天孫之孫也  
ししゆあそこのりたまひき○ここにわたつみのかみ○ひかへをろがみまつりて○ねもろにつかへまつりき○

時海神 迎拜延入 慇懃奉慰  
かくてみむすめよたまひめのみこととあはせまつりき○かれわたつみやにをどまりすみたまふこと○すで  
己

因以女豐玉姬命妻之 故留住海宮  
にみとせになりぬ○このちひこはほでみのみこと○しばしばみなげさしたまひければ○よたまひめのみ  
經三年 是後彥火火出見尊數有歎息 豐玉姬命

問曰天孫豈欲還故鄉歟 對曰然  
こと○あまつかみのみこもしもつみくににかへらむとねもほすかをまをしたまへば○しかりこたへたま  
ひき○よたまひめのみこと○やがてそのちちかみにまをさく○うまひをうはつくににかへらまほしとねも

豐玉姬命 卽白其父神曰 貴客意望欲還上國  
はせりたまをしたまひき○ここにわたつみのかみ○うををすべつとへて○そのはりをまきとふに○ある  
海神於是 總集海魚 覓問其鈎 有

一魚對曰 赤女久有口疾 疑是之吞乎 故卽召  
うをこたへまをさく○あつめひさしくちのやまひあり○もしはこれのみつらむかをまをしき○かれすなは  
ちわかめをゆして○そのくちをみれば○はりなほくちにありき○すなはちこれをとりて○ひこはほでみのみ

赤女 見其口 鈎猶在口 便得之 以授彥火  
赤女 見其口 鈎猶在口 便得之 以授彥火

火出見尊 因教曰 以此鈎與汝兄時  
ことによつけまつりき○かくてをしへまをしけちく○このはりをまましきことのみいふせにあたへたまはひ

則可詛言貧窮之本飢饉之始困苦之根 而後與之  
まひてよ○またみましきことのみいふせうみをわたらむとまに○すなはちわれかならずはやちたかなみをた  
又汝兄涉海時 則吾必起迅風洪濤  
こして○ねばらしたしなめてむまをしき○ここにひこはほでみのみことをねばわににのせまつりて○もど  
令其沒溺辛苦矣 於是乘彥火火出見尊於大鰐以送  
つくににれくりまつりき○これよりさきにわかれむしたまふとまに○よたまひめのみこと○ねもふるに  
致本郷 先是且別時 豐玉姬命 從容語  
かたりまをさく○あれすではらめり○なみかせはやからむひに○うみべたにまむでひ○あがためにうみや  
日 妾已有身矣當以風濤壯日出到海邊 請爲我造  
をつくりて○またたまへまをしき○このちひこはほでみのみこと○またこのことごとく○そのいろ  
産屋以待之 是後豐玉姬命 果如其言 將其  
とたまよりびめのみことをひさむまわさて○ひこはほでみのみことをさく○あれこよひみこうまむとま  
女弟玉依姬命來至 謂彥火火出見尊曰妾今夜當産  
に○いでなみたまひそまをしたまひき○ひこはほでみのみこと○なほさきたまはすて○くしにひをまし  
請勿臨之 彥火火出見尊猶不聽 以楯燃火

○廿四

てみそなはずききに○とよたまひめのみこと○やひろくまわになりてはひもことひま○つひにはぢみせた  
視之時 豊玉姬命 化八尋大熊罽匍匐逶迤遂以見辱  
まひしをうらみまつりて○ただちにわたつくににかへりたまひ○たまよりひめのみことをとせめて○みこと  
爲恨則 徑歸海郷 留玉依姬命 持養  
ひたしまつらしめき○みこのみなをひこなきまけうかやふさわへすのみこととせまをすゆきは○かのうみへ  
兒焉 所以兒名稱彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊者以彼  
たのうふや○もはらうのはをわやとしてふさき○しかるにいらかふさわへさるべき○みこやがてあれまじさ  
海濱産屋全用鸕鷀羽爲草葺之而葺未合時 兒卽生之  
○かれしかなづけまつりしなり○

あるふみにいはく○かなどのまへにしみづあり○のほどりにももえかつらのさあり○かれはこほほでみの  
一書曰 門前有一好井 井上有百枝桂樹 故彦火火出  
みこと○そのさきのぼらしてたちたまひき○ここにわたつみのかみのみむすめ○とよたまひめのみこと○み  
見尊跳昇其樹而立之 于時海神之女 豊玉姬命 手  
づからたままりをもちきて○みづくまじせしに○まにひとかけののなかにうつれるをみて○すなはちあ  
持玉椀來 將汲水 正見人影在於井中 乃仰視  
ふきみねろさて○まりをねとししかば○まりことごとくにわれくだけぬれをも○かへりもみすてかへりい  
之驚而 墜椀 椀既破碎 不顧而還入

りて○ちちははにまをさく○あれぬのへのさのうへにひとあるをみしに○かはさとうるはしく○かたちみや  
謂父母曰 妾見一人在於井邊樹上顔色甚美 容貌且  
びやかにして○ほとほとたたびとにあらすまをたまひき○ここにちちのかみささあやしみて○すなはち  
閑 殆非常人也 時父神聞而奇之 乃設  
やへたたまをしきて○むかへられしづめまつりて○すなはちいでませるゆゑをたまつれば○そのありさま  
八重席 迎入坐定 因問來意 對以情  
をつばらかにこたへたまひき○ここにわたつみのかみ○すなはちあはれをたまつりて○はたのひろもの  
之委曲 時海神 便起憐心 盡召鰭廣  
はたのさものをとせきごにめしてせひけるに○みなしらすとせまをしき○たたくちめくちのやまひありてまわ  
鰭狹而問之 皆曰不知 但口女有口疾不來  
す○すなはちとみにめしてそのくちをさぐりしかば○うせたりしつりばりをたちせころにえき○ここにわた  
卽急召至探其口者 所失之鈎立得 於是海  
つみのかみれきてけらく○れれくちめいまよりゆくさきえをなのみと○またあまつかみのみこのみけになわ  
神制曰 備口女從今以往不得吞餌又不得預天孫之  
づかりとせたきてたまひき○かれくちめいをもて○たはみけにたてまつらざるゆゑは○これそのことのも  
饌 卽以口女魚 所以不進供御 此其緣也  
となり○ひこほほでみのみこと○かへりたまひししたまふべきになりて○わたつみのかみまをしけらく○  
及至彦火火出見尊將歸之時 海神自言 今

者天孫 辱臨吾處中心欣慶 何日忘之

乃以思則潮溢瓊思則湖涸瓊 副其鈎而奉進之曰

天孫 雖隔八重隈 冀時復相憶而 勿棄置也

因教曰 以此鈎與汝兄時 則

稱貧鈎滅鈎落薄鈎言訖 以後手投棄與之 勿

以向授 若兄起忿怒有賊害之心 則出潮溢瓊以漂溺

之 若已至危苦求愍 則出潮涸瓊以救之

如此逼惱 自當臣伏 時彥火火出見尊受

彼瓊鈎 歸來本宮 一依海神之教

先以其鈎與兄 兄怒不受 故弟出潮溢瓊則

潮大溢而兄自沒溺 因請曰 吾當事汝為奴僕

願垂救活 弟出潮涸瓊則 潮自涸

而 兄還平復 已而兄改前言曰 吾是汝兄

如何為人兄而事弟耶時 弟出潮溢瓊

兄見之 走登高山則 潮亦沒山 兄緣高樹則 潮

亦沒樹 兄既窮途 無所逃去 乃伏罪曰

吾既過矣 從今以往 吾子孫八十連屬恒當為汝伴人

亦為狗人 請哀之 弟還出潮涸瓊則 潮

たのづからひき○ここにいろせそのいろどのわやしきみいさほひますことをしりて○つひにしたがひたまひ  
自息 於是兄知其弟有神德 遂以伏事

○こをもてはすせりのみことのはつこもろもろのはやびととも○いまにすめらみことのはほみやのみ  
是以火酢芹命苗裔 諸隼人等 至今不離天皇宫牆

わさのかたはらはなれず○ほえいぬにかはりてつかへまつるなり○よひとせたるはりをはたらぬは○こ  
之傍 代吠狗而奉事也 世人不償失釣此其縁

也  
れそのことのもとなり○

あるふみにいはく○いろせはすせりのみことは○うみさちをえたまひしかば○うみさちびこまをし○いろ  
一書曰 兄火酢芹命 能得海幸故 號海幸彦 弟

とひこはほでみのみことは○やまさちをえたまひしかば○やまさちびこまをし○いろせはほりふりかせ  
彦火火出見尊能得山幸故 號山幸彦 兄則每有風

ふくごとは○やがてそのさちをうしなひ○いろせはほりふりかせふけとも○そのさちたがはさりき○ここに  
雨 輒失其利 弟則雖逢風雨 其利不忒 時兄

いろせいろとにかたりけらく○われこころみにみましとさちがへせむともかたりたまへば○いろと  
謂弟曰 吾試欲與汝換幸 弟許

べなひたまひて○かへたまひき○ここにいろせはほりふりかせとさちをとりて○やまにいうてけたものをかり○  
諾因 易之 時兄取弟弓矢 入山獵獸

いろどはいろせのつりばりをとりて○うみにいうてうををとりすに○ともさちをえたまはすて○ひなでに  
弟取兄釣 入海釣魚 俱不得利 空手

てかへりましき○いろせやがていろどのゆみやをかへして○たのがつりばりをはたるときに○いろどはは  
來歸 兄即還弟弓矢而 責已釣時 弟已失

くはりをわたなかにうしなひて○まきたまはひしなかりき○かれことにひばりやちをつくりてあへ  
釣於海中 無由訪獲 故別作新釣數千與之

たまへとも○いろせかりてうけすて○もこのはりをせめはたりき○しかしか○ここにいろとらみべたに  
兄怒不受 急責故釣 云云 是時弟往海濱

でまして○うなたれもほりうれひさまよひたまふとき○かはかりのわなにかかりたしなめるを○すなはち  
低徊愁吟時 有川鴈嬰霜困兒 即起

あはれをねほして○とさてはなちやりたまふに○しまらくありてしほつちのねぢきて○すなはちまなしか  
憐心 解而放去 須臾鹽土老翁來 乃作無目

たまのをふねをつくりて○ひこはほでみのみことをせまつりて○わたなかにれしはなてば○たのづからに  
堅間小船 載彦火火出見尊 堆放海中 自然沈

しづみゆく○たちまちうましみちありき○かれみちのまにまにいでせせば○たのづからわたつみのかみの  
去 忽有可怜路 故尋路而往 自至海神宮

みやにいたりましき○このときわたつみのかみ○みづからひかへいれまつりて○すなはちみちのかはやへ  
是時海神 自迎延入 乃鋪設海驢皮

八重使坐其上 兼設饌百机以 盡主人之

禮 因從容問曰 天孫 何以辱臨乎

一云 頃吾兒來語曰 天孫 憂居海

濱 未審虛實 蓋有之乎 彦火火出見

尊具申事之本末 因留息焉 海神 則以其子

豐玉姬命妻之 遂纏綿篤愛 已經三年

及至將歸 海神 乃召鯛女 探其口

即得鈎焉 於是進此鈎于彦火火出見尊 因教曰

以此與兄時 則可稱曰大鈎踉蹌

しきて○そのうへにすゑまつりて○かねてももどりのつくろのものをまけそなへて○かやるやしくみあ

へたてまつりき○かくてたもふるにむいませをさく○あまつかみのみこは○なによゑにかたじけなくもいでま

せるぞをまをしたまへば○あるひはいふ○このころあがきていひけらく○あまつかみのみこ○うみへたに

うれひませりもまをせむも○まこといつはりをしらす○もししかまししやをまをしき○ひこははでみのみこ

と○このまをまつばらかにかたりたまひて○やがてとどまりましき○わたつみのかみ○すなはちそのみひ

すりよたまひゆのみこをのほせまつるに○つひにむつまかにうつくしみまして○すでにみせせへたま

ひき○かへりたまはむとするときになりて○わたつみのかみ○すなはちたひゆをよびて○そのうちをさぐり

しかば○やがてつりばりをえき○ここにこのはりを○ひこははでみのみこにたてまつりて○すなはちし

へまをさく○これをみましきことのみいふせにあたへたまはむとすに○すなはちたはちすすのみちまぢちち

るけちとどなへのりたまひをへて○やがてしりへでになげわたたまひてよとまをしき○またしほみつたま

しほひるたま○ふたつのかむたからをたてまつり○かくてそのたまをもちたまふまををしへまつりき○

またをしへまつらく○すせあげたをつくらば○みまはくばたをつくりたまへ○いろせくばたをつくらば

又教曰 兄作高田 汝者可作洿田 兄作洿田

○みましみこはあげたをつくりたまへとをしへまつりたまひ○わたつみのかみ○まことをつくしてかくあ

汝者可作高田 海神 盡誠奉助如此

矣 己而召集鰐魚問曰 天孫今當還去

備等幾日之内將以奉致 諸鰐魚 各隨其長短

定其日數中 有一尋鰐魚自言一日之内則當

致焉 故即遣一尋鰐魚以奉送焉 時彦火火出見

尊既歸來 一遵海神教而行之 先出潮滿

まをいだしたまへば○いろせてをあげてたはれくるしみ○またしほひるたまをいだしたまへば○やみてたひ  
瓊卽 兄擧手溺困 還出潮洞瓊則 休而平

らさき○そののちほすせりのみこと○ひびにやつれてうれひつつ○あれすでにまつしといひて○すなはちい  
復 其後火酢芹命日以襁褓而憂 日吾已貧矣 乃歸伏

ろにしたりがひたまひき○これよりさきよたまひめのみこと○あまつかみのみことにまをさく○あれすでに  
於弟 先是豊玉姬命 謂天孫曰 妾已有

はらゆり○あまつかみのみこと○いかでわたなかにうみまつらむ○かれうまれしとするとき○かならずさみ  
娠也天孫之胤 豈可産於海中乎故當産時 必就君

のみもとにまゐるむ○もしわがためにうみべたにうみやをつくりてまつたまはば○うれしからましとまをし  
所 如爲我造産屋於海邊以相待 是所望也

たまひき○かれひこほほでみのみこと○すでもとつくににかへりたまひて○すなはちうのはをもちて○う  
故彦火火出見尊已還郷 卽以鷓鴣羽 葺

女やをふかしめき○すちかひまだふさかへぬに○よたまひめのみこと○みつからればさなるかめにのらし  
爲産屋 葺未及合 豊玉姬命 自馭大龜

て○いろどたまよりひめのみことをむて○うみをとらしてさましつ○このときうむがつきすでにみちて○み  
將女弟玉依姬命 光海來到 時孕月已滿 産

はらたへがたくなりたまひぬ○かれふさかはするもまたすて○ただにいりましき○かくてれもふるにあまつ  
期方急 由此不待葺合 徑入居焉已而從容謂天

かみのみことにまをさく○あれまさかりにみこうみまつらむとまをさく○すでなのだきたまひとまをしたまへば○  
孫曰 妾方産 請勿臨之

あまつかみのみこと○そのことをあやしむもほして○かさまみたまひしかば○やひろねはくまわになりを  
天孫 心怪其言 竊覘之則 化爲八尋大熊鱈

り○しかしてあまつかみのみこのかさまみたまひしことをしらして○いたくはぢちらみまつりき○すでにみこ  
而知天孫視其私屏 深懷慙恨 既兒生

あれましてのちに○あまつかみのみこと○すでましてとひたまはく○みこのみなはなにとつけばえけむとひた  
之後 天孫 就而問曰 兒名何稱當可乎

まへば○こたへまをさく○ひこなきさたけうかやふさかへすのみこととなづけたまへとまをしをへて○す  
對曰 宜號彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊言訖 乃

なはちたまよりひめのみことをむて○うみとわたりてただにさりたまひき○ここにひこほほでみのみこと○  
將玉依姬命 涉海徑去 于時彦火火出見

すなはちうたひたまはく○たきつ せり○かもづくし しまに○わがぬねし○す  
尊乃歌曰 飫企都鄧利軻茂豆句志磨爾和我謂禰志伊

もはわすらヒ○よのここととむも○そのときかりにあたしをみなのちをもちてみこそ  
茂播和素羅珥譽能據鄧馭鄧母于時權用他婦以乳養皇子

ひたしまつりき○これよにちれもをとりて○こをひたすことのもとなり○またいはく○ひこほほでみのみこ  
焉 此世取乳母 養兒之縁也 亦曰 彦火火出見

○わたしをみなをとりてちれもゆれも○またいひかみゆゑひととして○すべてもろろのともをそなへれ  
尊取他婦爲乳母湯母及飯嚼湯坐人 凡諸部備行以

こなひて○ひたしまつりき○こののちよたまひりのみこと○そのみこのうるはしきことをさかして○みこ  
奉養焉 是後豊玉姬命 聞其兒端正 心

ころにいとめぐくれもはして○かへりさてひたしまつらむとしたりまひしかとも○さもえしたまはざりき○か  
甚憐重 欲復歸養 於義不可 故

れいろもたまよりひりのみことをまたして○ひたしまつらしりき○このときよたまひりのみこと○たまよ  
遣女弟玉依姬命以 來養也 于時豊玉姬命 寄玉

りひりのみことにつけて○すなはちたへまつれるみうた○わかたまの○ひかりはあり  
依姬命 卽奉答歌曰 阿軻娜磨廼比訶利播阿利

とひとはいへささみかよそひし○たふとくありけり○すべてこ  
登比鄧播伊佩耐企弼我譽贈比志多輔妬句阿利計利凡此

のよみかはしたまへるうたを○わけうたをなもよふ○  
贈答二首號 曰學歌

あるふみにいはく○しろせはすせりのみこと○うみさちをえたまひ○しろはをりのみこと○やまざら  
一書曰 兄火酢芹命 得海幸利 弟火折尊 得山

をえたまふ○しかしか○しろせうれひさよひてうみべたにますとさ○しほつつのをぢあへり○をぢをひま  
幸利云云 弟愁吟在海濱時 遇鹽筒老翁老翁問

をさく○なにゆゑにかうれひますぞとせば○はをりのみこと○たへたまはく○しかしか○をぢを  
曰 何故愁若此乎 火折尊 對曰 云云 老翁

さく○またなうれひましと○おれはからはむ○かのわたつみのかみののらすよさうまは○やはらわになも  
曰勿復憂 吾將計之夫海神所乘駿馬 八尋鱈魚

○それそのはたをたてて○たらはなのをどにそり○おれかれともさもにみひはかりてむとせして○すな  
也是堅其鱸背而在橘小戸吾當與彼共策之 乃

はらばをりのみことをむてまつりて○ともゆきてみひさ○このときにわにはかりてまつとさく○おはやくす  
將火折尊 共往而見之是時鱈魚策曰 吾八日

きてのち○まにまにまつかみのみこと○わたつみやにれくりまつらむ○ただわがさみのよさうまは○ひとひ  
以後方致天孫 於海宮 唯我王駿馬 一尋

ろわにこそ○これはひとひのうちに○かならずなくうまつらむ○かれいまあれかへりてかれをせせむ○  
鱈魚 是當一日之内必奉致焉 故今我歸而使彼出來

それのらしてうみにいりたまへ○うみにいりたまはむとさ○わたなかにれのづからうましをばまわりな  
宜乘彼入海 入海之時 海中自有可伶小汀

む○このはまのまにまにすまはば○かならずわがさみのみやにたりまむむ○このみやのみかぢののへ  
隨其汀而進者 必至我王宮 宮門井上

に○ゆりかつらのさあらし○そのさのうへのぼりてましませまをしとへて○やがてうみにいりたまへ○か  
當有湯津桂樹宜就其樹上而居之言訖 卽入海去矣故

天孫 隨鰐魚所言留居 相待已八日矣 久之方有一尋鰐魚來因乘而入海 每違前鰐魚教時

有海神之女 豐玉姬命侍者 持玉梳 當汲井

水 見人影在水底 不得酌取水因以仰見天孫

即入告其王曰 吾謂我王獨能絕麗

今有一客 彌復遠勝 海神聞之 曰試以

察之乃設三床請入 於是天孫 於邊床則

拭其兩足 於中床則 據其兩手 於內床則 寬坐

於眞床覆衾上 海神見之 乃知是天孫

益加崇敬 云云海神 召赤女

口女問之時 口女自口出鈎以奉焉 時海神 授鈎

火折尊因 教曰 天孫 還兄鈎時

則當言汝生子八十連屬裔貧鈎狹貧鈎言訖

三下唾與之 又兄入海鈎時 則宜在海濱以作風

招 如此則 吾起瀛風邊風 以奔波溺惱之

火折尊歸來 具遵海神教 至乃兄鈎之

日 弟居海濱而嘯之時 迅風忽起 兄則

溺苦 無由可生 便遙請弟曰 汝



しひさしくうなはらにましつれば○かならずよきわらわらむ○いかであれをすくひたまへとまをし○こ  
久居海原 必有善術 願以救我 於

にいろどうそよきをやりたまへば○かせもまたふさやみさ○かれいろせ○いろどのみいさほひあることをし  
是弟嘯已停而 風亦隨息 故兄 知弟德

りて○したがひまつらむとねもはずに○いろどみこころをけすて○おひこもしたまはさりき○こにいろ  
欲自伏事而 弟有愠色 不與共言 於是兄

せたふささをつけ○をばにをたならにぬりたもてにぬりて○そのいろをにまをさく○おはかくみかけがし  
著犢鼻 以赭塗掌塗面 告其弟曰 吾汚身如此

て○みましみこのわざをさびととなり○またわがうみのこのやをつづきまで○みましみこのみかきのへ  
為汝俳優者 又吾生兒八十連屬 不離汝之垣邊

をはなれず○ながくわざをさびとならむとまをしたまひて○すなはちわしをあげみゆき○そのればれし  
永當為俳優之民也 乃學足踏行 學其溺

どきのさまをまねびて○はじめしほわしをひたせるときは○あなうちをなし○ひさしいたるときは○あしを  
苦之狀 初潮漬足時則 為足占 至膝時則 學足

あぢ○ももにいたるときは○はしりもとほり○こしにいたるときは○こしをもじり○わきにいたるときは○く  
至股時則 走廻 至腰時則 捫腰 至腋時則 置

をひねにたさ○くびにいたるときは○てをあげたびろかしき○それよりさ下にいたるときは○あつてやじこ  
手於胸至頸時則 舉手飄掌 自爾及今 曾無廢絶

なし○さきにとよたまひめのみことまゐりて○みこころまじとするとさ○すりみまのみことにこひまをした  
先是豊玉姬命出來 當産時 請皇孫曰

まはく○しかしか○すりみまのみことささたまはさりしかば○とよたまひめのみこと○いたくらみてまを  
云云皇孫不從 豊玉姬命 大恨曰

しげらく○あがことをささたまはすて○われにはぢみせたまひつ○かれさまよりゆくささ○あがやつこをも  
不用吾言 令我屈辱 故自今以往妾奴婢

○さみがみもとにまゐては○なかへしたまひと○さみがやつこをも○あがもとにさなむをも○またかへさし  
至君處者 勿復放還君奴婢 至妾處者 亦勿復

とまをしたまひさ○これらみかぐぬがみかよはぬことのもとなり○つひにまをこれふふすまをもちて○その  
還 此海陸不相通之縁也 遂以眞床覆衾 裹

みこをつつみて○なごさにたさて○すなはちうみにいりてさりましまし○あるひはふ○とよたまひめのみこ  
其兒 置之波瀲即入海去矣 一云 豊玉姬命

と○みづからいださまつりてさりたまひ○ひさしくありて○あまつかみのみこを○わたなかにたさまつるへ  
自抱而去 久之 曰天孫之胤不宜置此海中

からすどのりたまひて○すなはちたまよりびめのみことに○いださまつらしめて○つひにたくりいだしまつ  
乃使玉依姬命 抱之 遂送出焉

りさ○はじめとよたまひめのみこと○わかれたまふとさ○うらみはなはだしかりさ○かれはをりのみこと  
初豊玉姬命 別去之時 恨言既切 故火折尊

○またわひたまはひこのかたきをしろしめして○すなはちみうたれくりたまひき○すでにかみにみゆ○  
知其不可復會 乃有贈歌 已見上

ひこなきさたけうかやふさあへすのみこと○そのみをばたまよりびめのみことをみめしたまひて○ひこいつせ  
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊以其姨玉依姬命為妃 生彦五

瀨命 のみことをうみたまひき○つぎにいなひのみこと○つぎにみけいりぬのみこと○つぎにかひやまといはれびこの  
次稻飯命 次三毛入野命 次神日本磐余彦

尊 凡四男矣 久之 彦波瀲武鸕鷀草葺不合  
みこと○すべてよばしらのひこましましき○ひさしくましまして○ひこなきさたけうかやふさあへすのみこと○

尊崩於西洲宮 因葬日向吾平山上陵

あるふみにいはく○まづひこいつせのみことをうみたまふ○つぎにいなひのみこと○つぎにみけいりぬのみ  
一書曰 先生彦五瀨命 次稻飯命 次三毛入野

命次狹野尊 亦號神日本磐余彦尊 所稱狹野尊者是年  
こと○つぎにさぬのみこと○またかひやまといはれびこのみことをまます○さぬのみことをまますは○これみ

少時之號也 後撥平天下 奄有八洲  
としわかかりしときのみななり○のちにあめのしたをばらひたひらげたまひて○やしまくにしろしめしき

故復加號 日神日本磐余彦尊  
○かれまたみなをたたへて○かひやまといはれびこのみことをまます○

あるふみにいはく○まづひこいつせのみことをうみたまふ○つぎにみけいりぬのみこと○つぎにいなひのみ  
一書曰 先生彦五瀨命 次三毛入野命 次稻飯命

こと○つぎにいはれびこのみこと○またかひやまといはれびこのみことをまます○  
次磐余彦尊 亦號神日本磐余彦尊

あるふみにいはく○まづひこいつせのみことをうみたまふ○つぎにいなひのみこと○つぎにかひやまといは  
一書曰 先生彦五瀨命 次稻飯命 次神日本磐

余彦尊 次稚三毛野命  
れびこのみこと○つぎにわかみけぬのみこと○

あるふみにいはく○まづひこいつせのみことをうみたまふ○つぎにいなひのみこと○つぎにみけいりぬのみ  
一書曰 先生彦五瀨命 次磐余彦火火出見尊次彦

稲飯命 次三毛入野命  
こいなひのみこと○つぎにみけいりぬのみこと○

日本紀神代下終  
やまどふみかみよのしものまさをばりぬ

三部本紀卷之四終

右日本紀神代上下二卷。亞於古事神代記者。而博載諸說存異傳。實我邦家之至寶也。然見行諸本。脫誤既多。傍訓未備。余常憂之。校讎有年。今改竄略盡。訓點漸成。乃遂爲印本。以充家童拜誦之用云。

于時明治十五年一月十日

松岡調謹識

友人

常陸國笠間 水野秋彥 校

讚岐國高松 友安盛敏 訂

香木舍大人著書目錄

古事記 刪定	三册	日本紀全	三十册
古語拾遺全	一册	帝皇系圖全	一册
新撰姓氏錄全	三册	國造本紀全	一册
大神宮儀式帳全	二册	神名帳全	八册
祝詞抄全	一册	國郡鄉名記全	五册
出雲風土記全	二册	尾治物部兩家纂記全	一册
萬葉集全	五册	和名類聚鈔全	十五册
三部本紀全	五册	顯幽現隱圖說	一枚
日月考	一册	國土考	一册
氣吹戸圖記	一枚	皇國古字徵	一册
齊明紀童謠辨 刻成	一册	弓矢本末	一册
古道葬祭式	一册	小乘涅槃論辨論	一册
家造比譬 刻成	一枚	陰名考	一册

讚岐國官社考證	刻成三冊	式外官社錄	一冊
琴平官ゆにばれ記	一冊	根國底國之考	一冊
金刀比羅宮古今靈驗記	三冊	現存皇國古錢譜	二冊
載史姓名錄	十二冊	現存皇國古印譜	一冊
玉藻帖	二帖	以上冊五部は彫刻かつ草稿乃成れるもれ也	

明治十七年六月廿八日版權免許  
同 年九月十日出版

編輯者 松岡 調

讚岐國那珂郡琴平村字川西  
千七拾七番地ノ内壹番屋敷寄留

愛媛縣士族

出版人 新居政七

讚岐國香川郡高松  
濱ノ丁九拾二番地

定價金五拾錢

